

# 精神障害者から見た人々

広田和子

精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

Vol.3

神奈川県新聞記者 佐藤奇平さん(30歳)

2001(平13)年6月8日午後。日本中の精神障害者が悲しみに沈んだ大阪児童殺傷事件。この事件が起きたことを佐藤君からの電話で知った。佐藤君は、その時点で、そして現在も、全国の地方新聞社の現場で働いている中で、精神科救急の課題をトップクラスで理解している記者。

出会いは、98年の秋。私が「不登校・中退生のための生き方探検」の主催者として、彼ら彼女らの夢づくりのきっかけに、と神奈川県警伊勢佐木署・横浜市消防局・横浜港郵便局・横浜市交通局等々、中卒で就職できる職業について職業人の協力を得た催しを多くの県民に知ってもらいたくて、こちらから神奈川県に電話を入れた。

佐藤君は当時遊軍記者。遊軍とは、県警記者

クラブ、司法記者クラブ、県政記者クラブ、市政クラブ等のどこにも所属せず独自のテーマを取材して報道する人。こうしたことは佐藤君の先輩にあたり、10年以上の交流があるAさんに教えてもらった。Aさんはいつも言っている。「奇平はいいよ。あいつはね…」競争社会と思われるマスコミにあつて、これほど後輩を評価している話を聞くと、聞き手がいい気分になる。

そのようなこともあつて、24時間精神科救急医療システム、24時間相談窓口の必要性を私が佐藤君に語りだしたとき、患者・家族、そして救急隊・警察署と、すべての人が困っていることをすぐ理解してくれた。

その後、24時間精神科救急を考える集会の記事を書き始めてくれたのを皮切りに、独自の取材を開始して、衛生行政に切り込んでいったと思われる。県衛生行政関係者は「佐藤記者は何なの？あの人はイヤだ」と私に言った。衛生行政がそれまでマスコミの取材を受けるのは、精神科病院の不祥事等で、精神障害者施策につ

いて正面から取材を受けたことがなかったための力量不足だと思う。私がアクティブに発言したことで、横浜市衛生行政関係者が私を委員からははずすこと等を考えたりした旧態依然とした体質が、ストレートな佐藤君の取材姿勢をうまく受容できなかったのだと私は捉えている。

「精神科医療を普通にしよう。他の病気と同様に24時間安心して救急車で利用できるようにしたい」そうした当たり前の施策を実現させるために、佐藤君はジャーナリストとして掘り下げた取材をしてガンバってくれた。

何度もレビューに書いてるように、福祉や医療を必要としている人が警察に保護されている現実。それが警察と精神障害者の関係を不幸にしていると私は考えている。

一方で、マスコミの新人記者は県警記者クラブに配属され、最初の仕事は警察回りからスタートする。そこで保護されている精神障害者を見ることもあれば、保護された人のことをいう「マル精」とか「MD」(メンタルディスプレイオーダーの略)という警察の無線用語をおぼえる。

そうした新人記者時代の精神障害者に対する偏見を、その後もずっと持ち続けてしまうと、身をもって知っている佐藤君は、そのマスコミの一員として、「精神科救急」の課題をずっと追ってくれた。

2002(平14)年9月、本社から支局へ佐藤君が転動したときに私は、「奇平ちゃん！パバランチにならないでいつまでもジャーナリストでいてね」と言った。

## ひろたかすこ



かつて私は主治医に「文章を書くのが好き」と語っていたところ、それが病状としてとらえられていた時代もあった。インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。現在も毎日付錠の向精神薬をのまないで眠れないのんでも音がすれば眠れないので、横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。